

天野太郎設計の住宅における居間・食堂・台所空間の連結に関する考察

正会員 ○北川 剛司 *1
同 山名 善之 *2

天野太郎 連結 単位空間
平面構成 食堂

1. 研究背景及び目的

天野太郎 (1918-1990)^{註1)} は生涯を通して連続性を主眼とした設計を行ってきた建築家である。言説の中では居間・食堂・台所を住宅の内部空間における「住まいの軸」^{註2)} として位置づけており、またそれらを「流動する空間」^{註3)} として表現している。天野の住宅の内部空間は機能と一対一に対応した単位空間^{註4)} に分割することができるが、特定の壁に囲まれた独立した室に対応しているとは限らない。これらの単位空間どうしの間には空間をつなぐ連結部が生じると考えられる。

本研究では住宅内部における単位空間の連結部に着目し、「住まいの軸」とされる居間・食堂・台所と隣接する他の空間との関係を分析・考察することによって、天野太郎の設計手法の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 研究対象及び資料

天野太郎もしくは天野・吉原設計事務所が設計したもののうち、天野が中心となって設計を行った1951年から1978年までの住宅作品25件^{註5)} を研究の対象とする。対象資料は吉原正のもとに保管されている原図と青焼きで、その内訳は平面図(詳細図含む)121枚、断面図(詳細図含む)214枚、立面図53枚、その他686枚^{註6)} である。

3. 方法

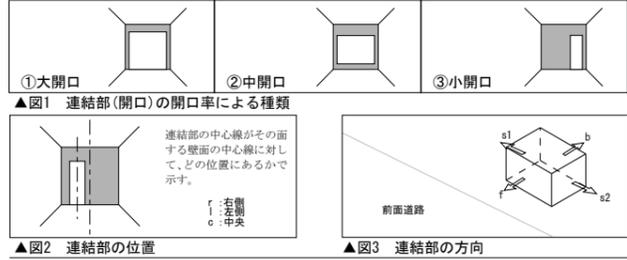
3-1. 対象とする単位空間の機能による分類

原図をもとに単位空間の分割図を作成する。

対象とする単位空間を食堂(D)、台所(K)、居間(L)、居間・食堂・台所以外の居室(R)、居室以外の内部空間(E)、の5つの機能に分類する。

3-2. 単位空間における連結部の属性の分類

単位空間の各壁面に対し、連結部にみられる属性の形状、位置、素材について分類を行う。形状に関しては図1に示す3種類^{註7)}、素材に関しては透明・不透明^{註8)}、位置に関しては壁面上の連結部のどの位置にあるかを図2に示す。また、連結部の方向の決定は前面道路^{註9)} を基準とし、前面をf、後面をb、側面をs1、s2とする(図3)。



Consideration about the connect of living room,dining room and kitchen in the houses Taro Amano designed

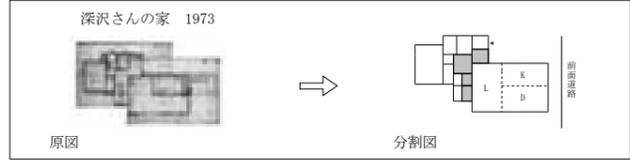
3-3. 隣接する単位空間の機能による連結部の分析

対象とする単位空間において、図式化を行い、連結部を機能の組み合わせごとに分類する(表3)。また図式化された全作品を傾向別に分類する(表4)。

4. 研究内容

4-1. 単位空間の機能による分類結果

平面構成の分割を行い、さらにそれに対応する機能に分類した(図4)。



▲図4 平面構成の分割

4-2. 連結部の属性の分類結果

単位空間における連結部の属性を分類し(表1)、さらに機能ごとに集計した(表2)。その結果、形状及び素材において居間・食堂以外の単位空間では小開口、不透明が多いことがわかった。また位置については、64ヶ所ある食堂の連結部のうち32ヶ所と半数を中央が占めていることがわかった。

▼表1 全単位空間の連結部の性質(一部)

図面	部屋名※	方向	形状	素材	位置	分割図	
1951 上村さんの家	D	f	①	透明	c		
		b	①	透明	c		
		s1	①	透明	c		
		s2	③	不透明	r		
		K	f	①	透明		c
		b	①	透明	c		
	L	s1	①	透明	c		
		s2	①	透明	c		
		f	①	透明	r		
		b	①	透明	r		
		s1	①	透明	r		
		s2	③	不透明	l		
R1	f	①	透明	r, l			
	b	①	透明	r, l			
	s1	①	透明	r, l			
	s2	①	透明	r, l			
	f	③	不透明	r			
	b	③	不透明	r			
1951 中田・天野邸	共有部	R1	f	③	不透明	c	
		b	③	不透明	c		
		s1	③	不透明	c		
	中田邸	L	f	③	不透明	c	
		b	③	不透明	c		
		s1	①	透明	c		
R2	s2	③	不透明	c			
	f	③	不透明	c			
	s1	③	不透明	c			
	s2	③	不透明	c			
	f	③	不透明	c			
	b	③	不透明	c			

※ D: 食堂 K: 台所 L: 居間 R: 居間・食堂・台所以外の居室 E: 居室以外の内部空間

▼表2 単位空間の機能別にみた連結部の種類

	合計	形状			素材		位置		
		①	②	③	透明	不透明	r	c	l
全	284	86	1	196	97	186	86	118	79
D	64	30	1	33	32	32	19	32	13
K	52	9	0	43	9	43	15	23	14
L	65	29	0	36	33	32	22	24	19
R	51	7	0	44	8	43	16	14	21
E	52	11	0	41	15	37	17	21	14

KITAGAWA Takeshi, YAMANA Yoshiyuki

■考察

「流動する空間」と表現し、「住まいの軸」と位置づけられている居間・食堂・台所のうち、台所に関しては形状において小開口、素材において不透明が多く、他の2つの機能とは異なった傾向をみせている。また居間と食堂は形状、素材において類似した傾向をみせているが、位置において食堂では中央が多いことが両者の差異として捉えられる。

4-2. 機能による連結部の分析結果

作成した図式をもとに、機能の組み合わせ別に集計を行った(表3)。その結果、それらの傾向をみていくと、食堂・居間の組み合わせは22件、食堂・台所の組み合わせは23件であるのに対し、居間・台所は2件しかみられない。さらに属性についてみると、食堂・居間の連結部とその他の連結部の間に明確な差異がみられ、形状においては食堂・居間に大開口が多く、その他は小開口が多い。素材については居間・食堂に透明が多く、その他は不透明な素材が多く用いられている。位置については食堂が居間と連結する際、約8割が中央であることがわかった。

▼表3 機能の組み合わせによる連結部の種類

		形状			素材		位置			
		①	②	③	透明	不透明	r	c	l	
D	L	22	19	1	2	20	2	2	19	1
	K	23	7	0	16	7	16	9	7	7
	R	13	2	0	11	3	10	7	4	2
	E	6	2	0	4	2	4	1	1	4
L	K	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	R	21	4	0	17	4	17	8	11	2
	E	20	5	0	15	9	11	7	5	8
K	R	14	0	0	14	0	14	4	8	2
	E	13	2	0	11	2	11	5	5	3

■考察

食堂・居間、食堂・台所の組み合わせによって居間・食堂・台所は連結され、図式からも居間・台所の連結は食堂を介して行われていると言える。また形状の面から連結部をみたとき、食堂・居間は大開口により連続性が高められている。また素材の面からも食堂・台所は不透明な素材が用いられていたが、食堂・居間は透明な素材によって連続性を高めている。さらに食堂・居間の連結部において中央が多くみられることから大開口・透明・中央という属性によって食堂から居間への連続性が強められている。またそれぞれの住宅について居間・食堂・台所の連結方法をみることによって分類することができ、食堂が基点になったものが全対象住宅のうち多くを占めている。

これらのことから、食堂が「住まいの軸」において基点となっていると考えられる。

5. まとめ

天野太郎設計の住宅の内部空間において、食堂は居間・台所の間に位置しているものが多く、居間・台所が食堂を介して連結されていることがわかった。さらに食堂・居間の連結部において大開口・透明・中央という属性が用いられることによって、食堂から居間への連続性が強められているとわかった。またこれらのことから、食堂が「住まいの軸」においての基点となっており、住宅の内部空間における連続性を高めているということがわかった。

*1 東京理科大学大学院工学研究科 修士課程

*2 東京理科大学工学部建築学助教授 PhD

謝辞: 本研究の情報・図面提供にご協力いただいた吉原正氏、橋本久道氏に深謝の意を表します。

脚注: 註1) F. L. ライト、連藤新に師事し、新花園ゴルフクラブや東京芸術大学附属図書館などの作品がある。註2) 参考文献1) p. 134-137註3) 共著「建築について」『新建築』新建築社、1958年、p. 31-34。註4) 原図から平面構成の分割により抽出された空間。註5) 天野太郎研究室、天野・吉原設計事務所設計を共にした吉原正の選定による作品。なお、全25件のうち計画案は2件存在し、中田・天野邸に関しては2世帯住宅であり、居間・食堂・台所はそれぞれにあり、別々の集合体とみなす。註6) スケッチ、伏図、原寸図、設備図などが含まれる。註7) 連結部における開口率が8割以上を大開口、5割以上8割未満を中開口、5割未満を小開口とする。またそれらは往来可能なものを前提として分類を行った。註8) 隣接する単位空間が見える場合を透明、見えない場合を不透明とする。註9) 角地の場合は玄関へのアプローチのある道路を前面道路とする。参考文献: 1) 吉原正編『有機的建築の発想—天野太郎の建築』建築資料研究社、2001年。2) 栗田勇著『現代日本建築家全集13』三一書房、1973年。

▼表4 基点となる単位空間別の図式の分類

機能	図式	
D	上村さんの家 1951	天野邸 1951
	音羽の家 1955	北出邸 1958
	武藤邸 1960	松原の家 1961
	成城の家 1962	向井邸 1964
	小堀さんの家 1964	川口さんの家 1965
	浪沢さんの家 1966	新保さんの家 1967
R	下落合の家 1967	永野さんの家 1968
	磯野さんの家 1973	田中さんの家 1973
	増田邸 1974	和氣邸 1978
	中田邸 1951	須賀邸計画 1958
	親子の家(南) 1962	親子の家(北) 1962
	L	深沢さんの家 1973
短野邸計画 1961		大野邸 1966

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Univ. of Science, PhD